

知識と実在論：パトナムの場合

横山 幹子*

Knowledge and Realism: Case of Putnam

Mikiko Yokoyama

知識という概念について検討するさまざまな方法があり、哲学の立場からの検討もその一つである。現代の哲学者であるヒラリー・パトナムは、知識の客観性に着目しながら、実在論をめぐる自己の立場を、形而上学的実在論、内的実在論、自然な実在論（常識の実在論）へと変化させてきている。この論文では、彼の実在論をめぐる考えの変遷を追いながら、実在論に対する態度と知識についての考え方との関係について考察する。そのため、まず、デューイレクチャーはじめその他の論文を参考に、形而上学的実在論、内的実在論、自然な実在論がそれぞれどのような立場なのかを説明する。次に、それぞれの立場が知識についてどのような考えを引き起こすのかを論じる。さらに、彼が最終的にたどり着いた自然な実在論の問題点を知識という点に着目して考察する。そして、最後に、知識についての考え方と実在論に対する態度との間には密接な関係があるということを主張し、知識についてどのように考えるかという問題に答えを出すためには実在論に対する態度を決めなければならないが、実在論に対してどのような態度をとるかを決定するにはさらなる検討が必要であるということを指摘する。

Abstract

There are several ways of approaching the problem of knowledge. One of them is from a philosophical point of view. Hilary Putnam, a contemporary philosopher, has changed his position towards realism, from metaphysical realism to internal realism, and then, to natural realism (common-sense realism), focusing on the objectivity of knowledge. This thesis examines the relationship between the concept of knowledge and the concept of realism in Putnam's progression. The main objective of this thesis is to show that the concept of knowledge is closely related to the concept of realism and that the problem of knowledge is difficult to solve because the problem of realism is difficult to solve. First, the positioning of metaphysical realism, internal realism and natural realism is explained through examining THE DEWEY LECTURES and other articles. Next, it is examined how each view on realism influences the concept of knowledge. Then, in particular, the relationship between natural realism and the concept of knowledge is discussed in depth. Finally, it is argued that the concept of knowledge has a close relation with the concept of realism and that the attitude towards realism has to be decided to solve the problem of knowledge. It is also pointed out that further examination is required in order to decide the attitude towards realism.

* 筑波大学図書館情報学系
Institute of Library and Information Science, University of
Tsukuba

1. はじめに

われわれは、書物を読んだりさまざまな情報源に触れたりすることによって知識を得ていると考えている。では、その知識とはどのようなものなのだろうか。ここでは、哲学の立場から、知識について考えることを目的とする。

哲学においては、古来よりさまざまな知識についての説があるが、問題が解決したわけではなく、知識についての議論は現在でも続いている。そして、現代イギリスの哲学者であるマイケル・ダメットが、实在論と反实在論の対立を、真理についての考え方（言明がわれわれの認識力から独立に实在によって真または偽であるかとか、二値を認めるかどうか等）との関わり、さらには意味の理論との関わりで論じて以来、实在論に対してどのような立場をとるかということと知識をどのようなものとして考えるかということは、これまで以上に密接に結びついてきている。¹しかし、一見したところ、实在論に対する態度と知識についての考え方はそれほど密接に結びついているようには思われない。そのような状況を受け、本論文では、知識について考えるという大きな問題の中でもとりわけ、实在論との関わりという観点から、現代において知識がどのようなものと捉えられているかを詳しく考察し、また实在論に対する態度と知識についての考え方の間に関係があることを主張し、それぞれの知識についての考え方にはどのようなことが前提されているかを明らかにすることを目指す。

そのような考察を行うために、本論文では、現代アメリカの哲学者であるヒラリー・パトナムの考えを手がかりとする。ここで彼をとりあげる理由は、以下の点にある。(1)彼がダメットの影響も受けながら自己の思想を発展させていく中で、ダメットとは異なり、实在論をめぐる自己の立場を、形而上学的实在論、内的实在論、自然な实在論（常識の实在論）と劇的に変化させてきているということ、(2)そして、彼にそのような変化を起こさせた一つの要因が知識の客観性や知識をわれわれが得ることができるという可能性をどのようにしたら保証できるだろうかという考えであると思われるということ、(3)そのような点を考慮するならば、現代において知識がどのようなものとして捉えられているかを实在論との関わりにおいて見るという目的のためには、パトナムの思想的展開を見ることは一つの適切な選択肢であると考えられるということである。

パトナムの实在論をめぐる立場の変遷を追いながら実

在論に対する態度と知識についての考え方との関係について考察するために、パトナム自身について概観したうえで、まず、彼の立場の変遷をデューイレクチャー²での彼自身の回想にしたがってまとめる。なぜなら、その論文で彼は自然な实在論を表明し、かつ、自己の過去の立場をなぜその立場をとろうと思ったかという点も述べて解説しているのだから、实在論との関わりという観点から知識について考察しその関係を主張するために考慮する主論文としてそれを選ぶことは、適切だと考えるからである。ただし、その際、必要に応じてそれぞれの立場が表明されていた当時の彼の論文を参照する。次に、それらの立場が知識についてのどのような考えを引き起こすかについて論じる。さらに、彼が最終的にたどり着いた自然な实在論という立場の問題点を知識という点に着目して考察する。そして、最後に、实在論に対する態度と知識についての考え方との間には密接な関係があるということ論じ、そのうえで、实在論に対してどのような立場をとるか、したがって知識についてどう考えるかを決定するには多くの問題が残されていること、言い換えるならば、实在論に対するさまざまな態度には、したがってさまざまな知識についての考え方には、それを受け入れるために受け入れなければならない前提があり、それらの前提のどれを受け入れるかに関してはさらなる検討が必要であるということを示唆したい。

2. パトナム

パトナムは、1926年シカゴ生まれのアメリカの哲学者である。心の哲学、科学哲学、言語哲学を主な関心領域とし、ウィリアム・ジェームズ、C.S. パース、ジョン・デューイ、ハンス・ライヘンバッハ、ルドルフ・カルナップ、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン等の思想的影響を受けている。

論理実証主義の立場から出発したパトナムは、彼の实在論に対する考えを何度か変化させている。初期に形而上学的实在論の立場をとっていた彼は、1970年代後半から80年代初めに、内的实在論と呼ばれる立場に転向する。そして、1990年代には、その内的实在論の立場から自然な实在論の立場に変わる。本論文で主に扱うデューイレクチャーは、彼が自然な实在論をはっきりと表明しているものである。

以下では、形而上学的实在論から内的实在論へ、内的实在論から自然な实在論へと移っていったパトナムの实在論をめぐる立場の変遷を扱うことになる。

3. パトナムの実在論をめぐる立場の変遷

3.1 形而上学的実在論

デューイレクチャーでパトナムが自己の過去の心情を回想しているとき、彼は実在論のアンチノミーを何とかしたかったのだと語っている。彼は、形而上学的実在論をとるならば、外的世界の指示を確定できないということにまず悩むのである。では、その形而上学的実在論とはどのような立場だろうか。彼は、形而上学的実在論、内的実在論、自然な実在論へと彼の立場を変えてきている。それゆえ、その最初の形而上学的実在論がどのような立場であるのかから考察を始めたい。

デューイレクチャーでは、形而上学的実在論者（伝統的実在論者）は、世界が記述者の興味から独立であると考える人々であると考えられている。そして、それだけではなく、そのような実在論には形而上学的なファンタジーが含まれていると言われている。形而上学的ファンタジーとは、決まった形式もしくは普遍もしくは性質の全体があり、任意の語の可能な意味はそれらに対応しており、すべての可能な思想の構造は前もって決まっていると考えることである。このような形而上学的実在論の特徴付けは、パトナムが形而上学的実在論を否定し内的実在論を唱えた『理性・真理・歴史』³の中でもう少し整理されて書かれている。そこでは、次のように言われている。「形而上学的実在論の見地では、世界は心から独立した諸対象のある固定された全体からなっている。『世界がどのようにあるか』についての真なる完全な記述がただ一つ存在する。真理は、語もしくは思惟記号と外的なものやものの集合との間のある種の対応関係を含んでいる。私はこの見方を外在主義の見方と呼ぶ。なぜなら、その見方のお気に入りの観点は、『神の眼からの観点』だからである。」⁴

このような形而上学的実在論の立場は、内的実在論を唱える以前のパトナム自身の立場だった。

1975年の『「意味」の意味』⁵で、パトナムは、たとえあるものが金であるかどうかを見分ける方法に関して古代ギリシアと現代を比べると現代での方法の方が信じられないほど洗練されているとしても、古代ギリシア語における〈金〉という語も現代の英語における〈金〉という語もその外延は同じであると言っている。つまり、彼は、理論から独立した実在の固定された領域があり、それをわれわれが記述するのだと考えていたのである。その意味で、彼は、のちに彼が批判する形而上学的実在論者だったのである。

そのころのパトナムの考えを『「意味」の意味』にそってまとめると次のようになる。

そこでパトナムが反対しなかった考えの一つは、話者の心理状態が内包を決定し内包が外延を決定するという考え、つまり、話者の心理状態が外延を決定するという考えだった。彼はそのために、双子地球という想定を持ち出す。つまり、地球上では〈水〉と呼ばれる液体の化学式が H_2O であり、双子地球上では〈水〉と呼ばれる液体の化学式がXYZである以外は何も地球と異なる双子地球を考える。地球上の〈水〉と呼ばれる液体も双子地球上の〈水〉と呼ばれる液体も普通の温度や圧力では区別できず、両方とも水のような味がし、水のようにのどの渴きを潤し、海や湖はその液体で満たされていて、その液体の雨も降るのである。そのような場合に、宇宙船で地球人が双子地球に行くなら、地球人は最初その液体が地球上と双子地球上で同じ意味を持つと考えるだろう。そして、化学式が違うとわかったときに初めて、双子地球では〈水〉という語はXYZを意味すると報告するのである。けれども、もし時代を遡り1750年という化学が発達していなかった時代に典型的な地球人であるオスカーが双子地球へ行くとすると状況は変わってくる。そこには、地球人オスカーのカウンターパートである双子地球人オスカーがいる。その際地球人オスカーも双子地球人オスカーも〈水〉について同じ信念を持っている。したがって、二人の心理状態ではそれぞれの〈水〉を区別することはできない。けれども、地球上での〈水〉という語の外延は、今も1750年も H_2O であり、双子地球上での〈水〉という語の外延はXYZである。「そのように、『水』という語の外延（そして、実際、その語の直感的な分析以前の使用法での『意味』）は話者自体の心理状態の関数ではないのである。」⁶

パトナムはまた、水のような自然種名の特徴の基準化された記述、言い換えるならば、そのステレオタイプもその外延を決定しないと言う。ステレオタイプには、言語共同体によって使われるすべての基準が含まれているわけではないのである。ニレのステレオタイプは普通の人の場合普通の落葉樹のステレオタイプと変わらず、それを満たすことがニレであるための必要条件であるとしても、ニレを見極めることには失敗するのである。

ではパトナムは何が外延を決定すると考えていたのだろうか。一つは、言語的分業である。彼によれば、言語的外延を限定できるのは、それぞれに関して専門家がいるからである。〈金〉という語を使う人すべてが金と他の金属を見分ける方法を修得している必要はない。その専門家がその外延を限定できればよいのである。「外延を定

めるのはもっぱら話者が属する言語共同体の社会言語学的な状態なのである。」⁷

もう一つは、実在との関わりである。彼によれば、可能世界W1で〈水〉という語がH₂Oであるものを指示し、可能世界W2では〈水〉という語がXYZであるものを指示するとしたら、W1とW2では〈水〉という語は同じ意味を持っていないのであり、可能世界W1での〈水〉という語が指示している外延は、可能世界W2においても、H₂Oであり、可能世界W2の〈水〉という語が指示している外延は、可能世界W1においても、XYZなのである。そして、そのような〈水〉という語が指示している外延は、話者の心理状態によって決まるのではなく、その外延との、つまり、実在との関わりによって決まる。たとえば、コップに入っている水を指して〈これは水である〉と直示的定義をする場合、〈水〉という語の指示しているものは、その世界で〈これ〉として指示される液体の部分（実在）と関係するものなのである。

以上のように、パトナムは、理論から独立した実在の固定された領域があり、それをわれわれが探求して明らかにしていくのだという形而上学的実在論の立場をとっていたのである。

3.2 形而上学的実在論から内的実在論へ

ここで、なぜパトナムが形而上学的実在論の立場を棄てなければならぬと考えたかに戻ろう。先にも述べたように、彼は形而上学的実在論の立場をとるならば、大きな困難におち当たると考えたのである。では、彼が考えた困難とはどのようなものであったのだろうか。

パトナムは、デューイレクチャーの中で次のように述べている。「私にこのように考えさせた考察の一つは、数学の哲学におけるいわゆるスコレームのパラドックスだった。つまり、すべての無矛盾の理論は無数の異なる可能な解釈を、非同型の解釈さえ持つというパラドックスだった。」⁸つまり、ある理論は、意図された解釈だけでなく、意図されなかった解釈をも持ちうるのである。そして、彼によれば、たとえ理論的制約以外に操作的制約（operational constraints）を加えたとしても事態は好転しない。彼によれば、「操作的に制約された述語によってはっきりと定義可能なものをのぞいたその言語の他のすべての述語は、まだ、意図されていなかった多くの解釈を持っており、その中には全く奇妙な解釈も含まれているのである」。⁹

パトナムによれば、このような考えは、日常言語やわれわれが経験科学で使う言語をも含む任意の言語について当てはまる。『モデルと実在』¹⁰の中で、彼は次のよう

に言っている。「言語の全使用（操作的プラス理論的制約）が唯一の『意図された解釈』を『固定』しないのは、公理的集合論それだけの場合に唯一の『意図された解釈』が『固定』されないのと同様である。」¹¹また、『モデルと実在』が収録されている哲学論文集第三巻『実在論と理性』¹²の序論では次のように言われている。「私が示していることは、われわれの実践がある言語のわれわれの使用に課す操作的制約や理論的制約がどのようなものであろうとも、常に、その制約すべてを満たす無限に多くの異なる指示関係（形式的意味論の意味での異なる『充足関係』、もしくは異なる対応）があるということである。」¹³

言語の操作的理論的制約だけでは唯一の意図された解釈を固定することができないということは、何もスコレームのパラドックスによってのみ言われることではない。パトナムは、哲学論文集第三巻『実在論と理性』の序論や『理性・真理・歴史』の中で、同じことを異なるやり方で説明している。前者では、彼は、退屈した神が言葉と世界の対応関係を男と女で変えるという場合を想定している。たとえば、われわれの実践が課す操作的理論的制約をすべて満足するような形で、男が〈猫〉という語を使うときは、猫の集合を指示し、女が〈猫〉という語を使うときは、猫の集合とは異なる集合（それはわれわれの実践が課す操作的理論的制約をすべて満たしている）、猫*の集合を指示するように変え、男が〈原因となる〉という語を使うときは因果関係を指示するが、女が〈原因となる〉という語を使うときは異なる関係（これもわれわれの実践が課すすべての操作的理論的制約を満たしている）を指示するように変える場合を想定する。この場合、われわれの実践に課される操作的理論的制約は満たされているのだから、男も女も自分たちが異なる対象や関係を指示していると気がつかないのである。

以上のように、パトナムは、われわれから独立した外的世界があり、われわれがそれについて理論をつくり、その理論の真偽は外的世界との対応関係によって決まると考える考え方では、指示の不確実性が生じると考えるのである。もちろん、ここで、操作的理論的制約だけで指示が決まるとは考えず、指示の魔法の力（指示を決定する何らかの他からの力）を想定して指示が確定していると言うことはできる。しかし、指示の魔法の力を想定しないなら、つまり、穏健な形而上学的実在論の立場をとるなら、われわれは指示を確定することができないのである。そして、これが、彼にとって、形而上学的実在論に関する大きな困難と思われたことなのである。

デューイレクチャーでは、その困難の背後にあるのは、外的対象をわれわれが知覚する際に何らかのインターフ

エース、たとえば、センスデータのようなものを考え、われわれが直接知覚するのは外的対象ではなくその知覚的な経験、インターフェースであると考えられる考え方だと言われている。そして、パトナムによれば、われわれが直接知覚するのは外的対象ではなく何らかのインターフェースであるというこのような考えは、われわれが知覚に関して近代以来慣れ親しんできた考えなのである。デューイレクチャーの中で彼は次のように述べている。「そのように、私は、われわれが近代の初め以来慣れ親しんできた種類の、知覚の因果説を含む実在論が正しいなら、認識の領域の内部に起こるすべてのものは、ほとんどの語の客観的な指示をまったく未決定なままにしておく結論した。」¹⁴

では、パトナムは、そのような困難にどのようにして対処しようとしたのだろうか。彼がその際とった立場が、デューイレクチャーの中でその困難に対処するための不満足な試みだったと言われている内的実在論の立場である。

デューイレクチャーの中で言われているように、内的実在論の立場は、検証主義の意味論、つまり、「われわれの言語の理解は、文に確証の程度を割り当てる能力のような技術を習得することのうちにあるという考え」¹⁵に近づくものだった。『理性・真理・歴史』の中で、パトナムは、「世界がどのような対象からなるかということは、理論もしくは記述の内部で尋ねるときにのみ意味を持つ問題である」¹⁶と言っている。このような考え方は、検証主義の意味論と考えられるものであるだろう。彼によれば、記号はそれらが誰によってどのように使われるかということから独立して対象に対応しているのではなく、使っている人たちの理論や記述の内部で特定の対象に対応しているのである。対象は理論や記述から独立ではないのである。以上のようなパトナムの考えを進めていけば、真理はその時々で違ってくる可能性がある。われわれの現在持っている証拠を越えた真理などありえなくなり、真理が相対的なものになりうるのである。このように、検証主義の立場は反実在論の立場にもなりうる。

けれども、パトナムはそのような考えには進まない。デューイレクチャーの中で、彼は、当時の自分の内的実在論がダメットの検証主義の影響を受けていたが全くダメットと同じように考えていたわけではなかったとして、理解について次のように言っている。「私は、ある言明の意味の話者の理解を、ダメットのようにその言明が今真であるかどうかを告げる能力、言い換えれば、その話者が現実を起こすことのできる状況のもとでそれが真であるかを告げる能力と同一視するのではなく、十分に合理

的な話者であるならその言明が十分によい認識的状況のもとで真であるかどうかを決定できるような能力をその話者が持っていることと同一視することによって、強い反実在論を避けた。」¹⁷そして、内的実在論の当時の彼は、真理についても、十分によい認識的状況のもとで保証されることと同一視することによって、強い反実在論を避けている。¹⁸『理性・真理・歴史』から引用するなら、「内在主義者の観点では、『真理』はある種の(理想化された)合理的受容可能性—われわれの信念相互の、そして、その信念とわれわれの信念体系の中でそれ自体表現されたものとしての経験とのある種の理想的整合性—であり、心から独立した、もしくは、談話から独立した『事態』との対応ではない」¹⁹のである。そのように、彼は、真理を十分によい認識的条件のもとで検証されることであると考えてるのであり、それゆえ、彼にとっては、真理は、今この場所での正当化ではなく、収束していくものなのである。

以上のように、パトナムの内的実在論が拒否していたのは、決まった形式もしくは普遍もしくは性質の全体があり、任意の語の可能な意味はそれらに対応しており、すべての可能な思想の構造は前もって決まっていると考える形而上学的実在論の立場である。そして、それを否定しても、相対主義にならないために、彼は、真理を十分によい認識的状況のもとで保証されることと同一視しているのである。

3.3 内的実在論から自然な実在論へ

今まで見てきたように、パトナムは、何らかの魔法の力を想定して形而上学的実在論の立場を維持することを望まなかった。また、彼は、指示の不確定性を避けるために、検証主義を徹底させ真理をその時々で違ってくるもの、理論や記述に相対的なものとする相対主義的な考えを選ぶこともしたくなかった。そして、デューイレクチャーでの彼によれば、内的実在論はそのアンチノミーを解決するための彼自身の不十分な試みだったのである。では、内的実在論はなぜ不十分な試みだったのであろうか。その点について、以下で、デューイレクチャーにそって見てみたい。

パトナムによれば、内的実在論にも、形而上学的実在論と同じ知覚の問題が残っていたのである。先に見たように、外的対象をわれわれが知覚する際に何らかのインターフェース、たとえば、センスデータのようなものを考え、われわれが直接知覚するのは外的対象ではなくその知覚的な経験、インターフェースであると考えられるならば、形而上学的実在論に指示の不確定性の問題が生じる

のであった。そして、彼によれば、そのようなインターフェースを考える考えを維持しているなら、外的対象についてだけでなく、十分によい認識の状況に関しても、指示の不確定性の問題が生じるのである。つまり、インターフェースを考えているかぎり、十分によい認識の状況にどのようにして近づくことができるのかという問題が残っているのである。

そのような内的実在論の問題を解決するためにパトナムが主張しているのが、自然な実在論という立場である。彼は、「形而上学的な空想に後退することなく、われわれの知識の主張は実在に対して責任を持っているというわれわれの感覚を正当化することができる道」²⁰、「反動的な形而上学と無責任な相対主義の中間の道」²¹として、自然な実在論を考えたのである。

自然な実在論の特徴は、外的対象を知覚するときわれわれが知覚しているのは外的対象自体ではなくその知覚的な経験、インターフェースであるという考えを棄てるところにある。パトナムは、「私の意味での自然な実在論者とは、(正常で『正確な (veridical)』) 知覚作用の対象は、『外的な』もの、もっと一般的に言えば、『外的な』実在の相であると考えている人である」²²と語っている。

自然な実在論の立場では、知覚作用の対象は、外的対象によってわれわれの主観性に引き起こされた何らかのものではないのである。そう考えることにより、知覚的な経験、認識されるもの、それに基づいてつくられた理論等の外に実在があるはずなのに、外にあるはずの実在を一つに固定できないという問題は避けられることができるのである。そして、パトナムによれば、そうすることが、形而上学的な空想に後退することなくわれわれの知識の主張が実在に対して責任を持つことができる道なのである。

4. 実在論をめぐる立場と知識についての考え方の関係

4.1 形而上学的実在論

では、実在論をめぐるそれぞれの立場と知識についての考え方の間にはどのような関係があるのだろうか。次にその点について見てみたい。

まず、形而上学的実在論についてである。形而上学的実在論の立場では、パトナムが語っているように、われわれの認識作用から独立した世界の存在を認めることができる。その立場によれば、われわれが外的対象を知覚していないときでも外的世界は存在しており、その外的世界はわれわれの主観で構成された世界ではない。つま

り、われわれの認識とは別の所に客観的世界が保証されることになるのである。そして、そのことによって、世界がわれわれの認識が変化することによって変化すると考える必要もなくなる。したがって、世界についての真理もわれわれが手にする証拠に基づくわれわれの認識の内部にあり後者が変化するならば真理も変化するという相対主義をも避けることができるようになるのである。そのように、形而上学的実在論の立場をとるならば、証拠を越えた真理を認めることになる。そして、この証拠を越えた真理を認めることは、われわれの実感に即している。われわれは、普通、現在われわれが持つ証拠だけではその真偽がわからないことも、真か偽のどちらかであると思っているのである。

このような考えの特徴は、パトナムが『「意味」の意味』の中で言っていた例を思い出すならば、よりわかりやすくなる。先に述べたように、彼によれば、可能世界W1で〈水〉という語がH₂Oであるものを指示し、可能世界W2では〈水〉という語がXYZであるものを指示したら、W1とW2では〈水〉という語は同じ意味を持っていないのであり、可能世界W1での〈水〉という語が指示している外延は、可能世界W2においても、H₂Oなのであった。また、〈金〉という語の外延は古代ギリシアでも現代でも変わっていないのであった。つまり、時代や場所によって、われわれの水や金についての心的表象や知識が変化したとしても、水は水のまま、金は金のままであるのであり、水や金についての真なる知識が何であるかは変わらないのである。時代や場所を越えた真理があり、われわれが手に入れる証拠を越えた真理がありうるのである。だからこそ、『「意味」の意味』でのパトナムは、科学を理論から独立した実在についての記述であると考え、科学は同じ実在についての理論として、時代とともに洗練され、より真理に近いものへと収束していく (converge) と考えたのである。そして、その立場から、たとえば、〈金〉は古代ギリシアと現代では意味が異なり、そのため、外延も異なり、その外延についての真理も異なるのだというような相対主義的な立場に反対していたのである。

しかし、形而上学的実在論の立場で、客観的な世界、それに関わる客観的な知識、真理が認められるからといって、すべてがうまく行くわけではない。証拠を越えた真理を本当にわれわれが知ることができるのかという問題が生じるのである。パトナムが内的実在論に立場を変えるとき指摘していたように、形而上学的実在論の立場では、指示の魔法の力を想定しないかぎり、指示の不確定性が生じるのである。ある語の指示を固定できないと

いうことは、その外延が固定できないということであり、その外延が固定できないならば、その外延の隠れた本性を見つけ出すことによって客観的な知識を得て、真理に到達できるという考えも成り立たなくなるのである。証拠を越えた真理を認めることができるというのではなく、魔法の力を想定しないかぎり、すべてが証拠を越えた真理になりかねないのである。

4.2 検証主義

パトナムは、形而上学的実在論の指示の不確定性を避けようとして、内的実在論の立場をとった。しかし、ここでは内的実在論の立場と知識についての考え方の関係を考察する前に、彼が内的実在論の立場に至るのに影響を受けたと言っていた検証主義の立場と知識についての考え方の関係について簡単に触れておきたい。

徹底した検証主義の立場をとるならば、形而上学的実在論の頃のパトナムが否定していた考えにならざるえなくなる。その立場では、われわれが知ることができるのは、知覚的経験だけであり、対象とはその経験からつくられた理論内部のものであり、その対象について何が真であるかも理論内部のものになるのである。だとすると、時代や場所によって理論が変化するならば、何が真であるかも変化することになり、証拠を越えた真理は認められない。そのようにして、徹底した検証主義の立場を進めていくなれば、時代や場所を越えた客観的な知識、真理は認められなくなり、相対主義になるのである。

しかし、その立場に利点がないわけではない。その立場によれば、真理は、われわれが決して到達し得ない、もしくは、到達していたとしてもそれを知ることができないようなものではない。真理はわれわれが手に入れる証拠によって知られるものなのである。

4.3 内的実在論

パトナムは真理に関して相対主義をとりたくなかった。けれども、魔法の力を想定して、形而上学的実在論の立場をとり続けることもしたくなかった。そこで、彼がとったのが、内的実在論の立場である。内的実在論の立場をとるならば、知識についてどのように考えることになるのだろうか。

パトナムによれば、内的実在論をとることにより、真なる知識がわれわれによって決して知られることのできないものになる可能性を排除することができる。われわれの側が真理についてどう考えるかが重要になるのである。

では、なぜそれは相対主義にならないのだろうか。内

的実在論当時の彼にとっても、相対主義は受け入れることのできない立場だった。それゆえ、彼は、真理を十分によい認識的条件のもとで検証されることだと考えることによって、真理を、今この場所での正当化ではなく、収束していくものと捉えたのである。

もしそのような十分によい認識的条件のもとでの検証ということがうまく説明できるなら、そのような真理についての考え方は、われわれの認識や理論に相対的ではない真理を認めることができるものである。証拠が変化し理論が変わっても、変わる前の理論がつけられるためのさまざまな言明は、十分によい認識的条件のもとで検討されていなかったのかもしれない。その立場は、われわれが現在手に入れている証拠を越えた真理を認めるが、十分によい認識的条件のもとで手に入れる証拠を越えた真理を認めないのである。そして、このような考え方は、われわれの真理についての実感に即しているように思えるのである。

しかし、話はそれほどうまくは進まない。十分によい認識的状况のもとにわれわれがいることをどのようにして知ることができるかという問題が残っているのである。自然な実在論を唱えているパトナムによれば、〈われわれは外的世界を直接知るのではなく客観的な外的世界についての主観的な知覚的経験を持つのだ〉という知覚についての考え方をとるならば、十分によい認識的状况のもとにわれわれがいるかどうかをわれわれが知ることは困難になるのであった。だとすれば、十分によい認識的条件のもとでの検証ということで真理を考えたとしても、それは、結局はわれわれが手に入れることができないものになりうるのである。

4.4 自然な実在論

われわれが真理に到達することができなくなるという状況に陥ることを避けるために、パトナムは自然な実在論ということを行った。彼によれば、自然な実在論の立場では、相対主義を避け、客観的な知識、証拠を越えた真理を認めることができ、そのうえ、知識や真理はわれわれが決して知ることのできないものではないということになるのである。われわれが世界についての真なる知識を得る可能性を否定することなく、相対主義を避け、あるものに関しては証拠を越えた真理を認めることもできるのである。

しかし、自然な実在論の立場に本当に問題がないのだろうか。ここでは、知識をどのようなものと考えるかということとの関わりで、パトナムの実在論に対する態度の変遷を見てきたのであるから、その視点で、自然な実

在論の立場を検討したい。具体的には、証拠を越えた真理に対する扱いを考察することによって、自然な实在論の立場を検討することになる。

5. 自然な实在論と証拠を越えた真理

5.1 証拠を越えた真理

自然な实在論の立場では、形而上学的实在論の場合と同様に、証拠を越えた真理が認められることになる。では、自然な实在論で認められる証拠を越えた真理とはどのようなものだろうか。

デューイレクチャーでは証拠を越えた真理として二種類の例が挙げられている。一つは、クリジー・ボーデンは斧で彼女の両親を殺した(Lizzie Borden killed her parents with an axe.) というものであり、もう一つは、いかなる知的地球外生物も存在しない(There are no intelligent extraterrestrials.) というものである。パトナムは、これらを、インターフェース概念を否定する自然な实在論が認めることのできる証拠を越えた真理だと考えているのである。したがって、ここでの証拠を越えた真理が証拠を越えている理由は、インターフェース概念にあるのではない。だとしたら、彼は、どのような理由で証拠を越えた真理を認めているのだろうか。

まず、デューイレクチャーでのパトナムの説明を見よう。そこで、彼は、ダメットの真理についての考え方を批判している。

ダメットによれば、实在論に関する問題は証拠を越えた真理を認めるか認めないかの問題と深く結びついている。そして、真理が証拠を越えているのは、それが話者によって検証できるものを越えている場合である。しかし、そのような真理の概念をわれわれが理解するためには、魔法の力を想定するしかない。ここで、魔法の力を拒否したいなら、検証されるものだけを真理として受け入れるしかないのである。つまり、魔法の力を考えるような形而上学的实在論でなければ、検証できるものを越えた真理を認めることができないということになる。そして、形而上学的实在論の立場をとらないダメットとしては、たとえば、クリジー・ボーデンは斧で彼女の両親を殺した〈が検証されないにもかかわらず真でありうる〉ということは言えないことになる。

しかし、パトナムによれば、その考えはおかしい。それは、理解と検証する能力の所有との違いを認めないために起こる考えである。理解できるけれども検証できない場合があるのである。われわれは、言語によって概念能力(conceptual abilities)を広げることができる。た

たとえば、〈あまりに小さくて肉眼で見ることのできないもの〉という表現の意味を、そのようなものを検証する方法がなくとも理解できるのである。そして、文を理解することとその文が真であるという主張を理解することとの間には密接な関係があるので、検証できない文でもそれを理解できれば、それが真理値を持っていることも理解できる。そのようにして、魔法の力を想定しなくとも、検証できない真理、証拠を越えた真理を認めることができるのである。

パトナムは、次のように言っている。「真理はときに認識を越えている。なぜなら世界の中で生じているものは、たとえそれらがわれわれの思考力(power to conceive)を越えていないとしても、ときにわれわれの認識力(power to recognize)を越えているからである。」²³

たとえば、クリジー・ボーデンは斧で彼女の両親を殺した〈を検証することができなくとも、われわれはそれを理解でき、それが真理値を持っていることも理解できる。そして、その真理が認識を越えているということは、ある殺人が認識を越えているということ以上のことではないのであり、見つけることのできない犯人がいるということを信じるために魔法の力を信じなければならないわけではないのである。

また、いかなる知的地球外生物も存在しない〉の場合も、言葉による概念能力の拡張、論理定項による概念能力の拡張が起こっている。われわれはそれを検証することができなくとも、それを理解でき、それが真理値を持っていることも理解できるのである。パトナムは、次のように言っている。「この推測が原則においてさえ検証可能ではないかもしれないという事実は、それが実在に対応していないということの意味しない。そうではなく、もしそれが真ならどんな実在がそれに対応しているかを、その言葉自体を使うことによってのみ言うことができるということである。」²⁴

次に、デューイレクチャーにおけるパトナムの証拠を越えた真理についての考えはインターフェース概念を認めるものになりうるというライトの批判²⁵に対して出された論文²⁶で、真理が証拠を越えていることの理由として、パトナムが挙げているものを見てみよう。

一つの理由は、認識的機会の偶然性である。たとえば、空間的・時間的状況が限界づけられているからというのが、認識的機会の偶然性に入る。クリジー・ボーデンは斧で彼女の両親を殺した〈がその例である。ただし、パトナムは、そのような認識的機会の偶然性による証拠を越えた真理を自然な实在論が認めるべきものとして認める一方で、認識的機会の偶然性とは異なる理由で、たとえば、

〈いかなる知的地球外生物も存在しない〉が証拠を越えた真理であることも、自然な実在論は認めることができると言う。そして、その理由とは、彼によれば、インターフェースを考えることではない。彼によれば、〈いかなる知的地球外生物も存在しない〉の真理が原則的に証拠を越えているのは、形而上学的実在論に戻るからではなく、それが論理的に反証可能だが検証不可能だからである。つまり、論理的結合子や量子子の使用は、しばしば論理的構造自体から明らかな理由で、認識を越えているからである。

これは、デューイレクチャーでのパトナムの説明と矛盾するものではない。あるものは認識的機会の偶然性により検証できないが、理解できるものであり、あるものは論理的に検証不可能だけれども、言葉による概念能力の拡張によって理解できるものである。そのような理由でそれらは証拠を越えた真理なのである。

上記二つの論文で言われていることをまとめるならば、パトナムは、真理に対応する何らかの性質があると考えそれを魔法の力で知ることができるとする形而上学的実在論とは別の方向で、証拠を越えた真理を認めようとしているのである。

5.2 問題点

前節のように証拠を越えた真理を認めることに何の問題もないのだろうか。言い換えるならば、パトナムの証拠を越えた真理の中には、魔法の力のようなものは含まれていないのだろうか。

重要な点は、概念能力の拡張や思考力ということをどのように捉えるかということである。先に見たように、パトナムは、〈リジー・ボーデンは斧で彼女の両親を殺した〉が検証されることができないとしても、われわれはそれが真理値を持つということを考えることはできると考えていた。また〈いかなる知的地球外生物も存在しない〉についても、言葉による概念能力の拡張、論理定項による概念能力の拡張を考えていた。彼によれば、われわれはそれを検証することができなくとも、それを理解でき、それが真理値を持っていることも理解できるのである。

しかし、概念能力の拡張や思考力の想定は、どれだけ確かなものなのだろうか。もちろん、それは非常に常識的である。けれども、私には、それが確かなものであると言うために、実際われわれはそうしているのではないかということ指摘するだけでは不十分であるように思える。たとえば、〈あなたはそうしているかと思っただけかもしれないけれど私はそのようにはしていない〉と主張す

る人はありうるし、そのような人を排除する理由もない。だとしたら、それは、形而上学的実在論の立場をとり、何らかの魔法の力を想定することと似てくるように思われるのである。

6. 結 論

以上で見てきたように、知識をどのようなものとして捉えるかということと実在論に関してどのような立場をとるかということは、密接に関係している。

形而上学的実在論の立場をとれば、われわれの認識作用から独立した世界を考えることができ、その世界についての客観的な知識を考えることができる。そして、その立場では、時代や場所によって変化するのはわれわれの知識の方であり、われわれが現在得ているのとは異なるかも知れない真なる知識、証拠を越えた真理があるということ認めることができる。ただし、この立場では、知識をわれわれが得ることができるという可能性について問題が生じる。われわれは、われわれの認識作用から独立した世界にどのようにして到達することができるのか。われわれの知識が真の知識に到達したとどのようにして言えるのか。われわれから独立した外的世界があり、われわれがそれについて理論をつくり、その理論の真偽は外的世界との対応関係によって決まると考える考え方では、指示の不確実性が生じるのである。そして、このような立場で知識をわれわれが得ることができるという可能性を認めるためには、魔法の力を想定しなければならないのである。

内的実在論が影響を受けた検証主義の立場を徹底させるならば、逆のことが生じうる。この立場では、知識をわれわれが得ることができるという可能性は認められる。外的対象とはわれわれの知覚的経験からつくられた理論内部のものであり、その対象について何が真であるかも理論内部のものになるので、真なる知識は、われわれが決して到達し得ない、もしくは、到達していたとしてもそれを知ることができないようなものではない。真理はわれわれが手に入れる証拠によって知られるものなのである。ただし、この立場では、証拠を越えた真理は認められない。真理は、証拠が変化し理論が変わるならば、変化するものなのである。したがって、時代や場所を越えた客観的な知識、真理は認められないことになり、相対主義を受け入れなければならないのである。

内的実在論の立場をとるならば、相対主義を避けることができる。時代や場所を越えた客観的な知識、真理を認めることができる。なぜなら、真理を十分により認識

的条件のもとで検証されるものであると考えるからである。そして、この立場では、知識をわれわれが得ることができるという可能性も認められる。なぜなら、この立場は、今われわれが手に入れる証拠を越えた真理を認める一方で、十分によい認識的条件に達している場合に証拠を越えた真理を認めているわけではないからである。しかし、ここにも前提されているものがあつた。それは、十分によい認識的条件に達していることをわれわれが知ることができるという考えである。そして、パトナムによれば、このように考えるためには、魔法の力が再び必要になってくるのである。

自然な实在論の立場をとるならば、魔法の力は不必要になる。外的対象とわれわれの知覚作用の間にインターフェースを考えないことによって、知識をわれわれが得ることができるという可能性が認められる。そして、その知識は、外的対象からなる外的世界についての知識であるから、その知識の客観性、相対的でない真理も認められる。そのうえ、その立場では、あるものについては証拠を越えた真理も認められるのである。しかし、この考えにも、受け入れなければならない前提があつた。概念能力の拡張や思考力ということが前提されていたのである。

このように、实在論に対してどのような立場をとるかによって知識についての考え方が分かれるのである。では、これらの実在論に対する態度のうちどちらか一つの立場が正しく、したがって、知識についての考え方のどちらか一つの立場が正しいとすることができるのだろうか。私は、少なくとも現時点ではどれか一つが正しいとすることはできないと考える。なぜなら、先にも見たように、それぞれの実在論の立場には、したがって知識についての考え方には、その立場をとるために認めなければならない前提、もしくはそれらの立場から必然的に生じる結果が含まれており、それらのうちのどれを正しいとして受け入れ、どれを間違つたものとして拒否するかということが明らかではないからである。ここで言えることは、それぞれの前提がどのようなものであるかということだけである。形而上学の実在論の場合は、魔法の力を想定するか真なる知識を知ることができるという可能性を放棄するかしなければならない。検証主義の場合は、知識の客観性や証拠を越えた真理の存在を諦めなければならない。内的实在論の場合も、パトナムによれば、形而上学の実在論の場合と同じ選択を迫られる。自然な实在論も概念能力の拡張や思考力ということが前提されている。どれか一つの実在論に対する態度を、したがって知識についての考え方を正しいと行うためには、それ

ぞれの諸前提等に関するさらなる考察、検討が必要になるだろう。

ただし、私は、实在論をめぐるさまざまな立場と結びついた知識についてのさまざまな考え方を理解すること、さらには、それぞれの立場をとるために受け入れなければならない諸前提（結果として受け入れなければならないものも含めて）を理解すること、それらだけでは意義がないとは思わない。われわれの多くは、客観的な知識、真なる知識が得られるものであると考えて生活している。また、今まで見てきたように、パトナムの实在論をめぐる立場の変遷を引き起こす要因となつたと思われるものも、客観的な知識、真なる知識を得ることができなければならないという考えであつた。そして、その当たり前とも思える立場を維持することの難しさが、彼の立場を次々に変えさせた。その中で現れたのが、实在論をめぐるさまざまな立場と結びついた知識についてのさまざまな考え方であつた。そして、それらの考察から明らかになつたのは、それぞれの立場をとるために受け入れなければならない前提、もしくは結果とそれぞれの立場との結びつきなのであつた。だとしたら、客観的な知識、真なる知識を得ることができるかどうかということに関心のある人にとっては、たとえその人が最終的にどのような立場や前提を受け入れることになるとしても、ここで提出された实在論に対する態度と知識についての考え方との関係やそれらの諸前提は、知識について考える際の一つの見取り図になりうるだろう。

凡例

- ・「」は、引用を表すために使われる。
- ・『』は、書名を表すために使われる。また、本文では、論文名を表すためにも使われる。
- ・引用の中で使われる『』は、原文における”を表す。ただし、書名・論文名の中の原文における”は、「」で表す。
- ・()は、引用以外の場所では、著者による補足を表す。また、原語を示すためにも使われる。
- ・〈〉は、論旨をわかりやすくするために、著者により挿入される。また、単語に使われている場合には、その単語が指示するものがその語の指示対象ではなくその語自体であるということを示すために使われる。

注

(1) Dummett, M. Truth and Other Enigmas. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1978. 本論文では真理という語が多出するが、真理についてどう考えるかは实在論に対する態度と密接に結びつ

き変化するものであり、その変化を見ることも本論文での主要な考察の一つなので、ここでは真理についての唯一の概念規定というものは行わない。また、それは知識という語についても同様である。

(2) デューイレクチャーは1994年3月22・24・29日に、コロンビア大学でパトナムが行った講演であり、そのときの内容が以下の *The Journal of Philosophy* にデューイレクチャーとして収録されている。Putnam, H. *The Dewey Lectures 1994: Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind*. *The Journal of Philosophy*. vol. XCI, no. 9, 1994, p. 445-517. また、それはさらに、Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 3-70. に再録されている。以下で引用する際は、後者を使用する。

(3) Putnam, H. *Reason, Truth and History*. Cambridge, Cambridge University Press, 1981.

(4) Ibid. p. 49. 以下、引用の際の原文のイタリックはアンダーラインで示す。

(5) Putnam, H. "The Meaning of 'Meaning'". *Mind, Language and Reality*. Cambridge, Cambridge University Press, 1975. (*Philosophical Papers, Volume 2*). p. 215-271.

(6) Ibid. p. 224.

(7) Ibid. p. 229.

(8) Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 15. ここで言われているスコーレムのパラドックスとは、モデル理論におけるレーヴェンハイム・スコーレムの定理に由来するものである。そして、この定理で言われていることは、理想的理論の場合でも、その理論のモデルは一意には決まらないということである。パトナムは、このモデル論における考えを、言語とそれが当てはまる対象（それを結びつけるものとして解釈がある）という二元論を考える場合には指示の不確実性が生じざるえないことを示すために使った。

(9) Ibid. p. 16.

(10) Putnam, H. "Models and Reality". *Realism and Reason*. Cambridge, Cambridge University Press, 1983. (*Philosophical Papers, Volume 3*). p. 1-25.

(11) Ibid. p. 4.

(12) Putnam, H. *Realism and Reason*. Cambridge, Cambridge University Press, 1983. (*Philosophical Papers, Volume 3*).

(13) Ibid. p. ix.

(14) Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 16.

(15) Ibid. p. 17.

(16) Putnam, H. *Reason, Truth and History*. Cambridge, Cambridge University Press, 1981. p. 49.

(17) Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p.17-18. ここでの〈十分によい認識的状况のもとで〉というのは、周囲の状況が認識を妨げるような状態になく、正しい認識を行うのに十分な環境にあるということの意味している。『人間の顔を持つ実在論』(Putnam, H. *Realism with a Human Face*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1990.) でパトナムが挙げている例をとるならば、〈私の書斎に椅子がある〉の場合には、それは、私の書斎にいること、明かりがついているか日の光が窓から射し込んでいること等の条件が満たされている状態であると考えられている。つまり、もしそこに椅子があるならば見えるという状況であると考えられている。以下、本文に生じる〈十分によい認識的状况のもとで〉も、上記の意味で使われている。

(18) 『人間の顔を持つ実在論』(Putnam, H. *Realism with a Human Face*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1990.) で、理想的な認識的状况というものは、たとえば〈私の書斎に椅子がある〉のような特定の言明に関してそれぞれ言われるものであり、その共同体がすべての真なる言明を正当化することができるような状況と同じではないと補足はしているものの、基本的な考えは同じである。

(19) Putnam, H. *Reason, Truth and History*. Cambridge, Cambridge University Press, 1981. p. 49-50.

(20) Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 4.

(21) Ibid. p. 5.

(22) Ibid. p. 10.

(23) Ibid. p. 69.

(24) Ibid. p. 58.

(25) Wright, C. Truth as Sort of Epistemic: Putnam's Peregrinations. *The Journal of Philosophy*. vol. XCVII, no. 6, 2000, p. 335-364.

(26) Putnam, H. Comments and Criticism when "Evidence Transcendence" Is Not Malign: a Reply to Crispin Wright. *The Journal of Philosophy*. vol. XCVIII, no. 11, 2001, p. 594-600.

文献

Brown, S. et al., ed. *One Hundred Twentieth-century Philosophers*. London, Routledge, 1998.

Dummett, M. *Truth and Other Enigmas*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1978. (抄訳として, Dummett, M. (藤田晋吾訳) 真理という謎. 東京, 勁草書房, 1986.)

野本和幸. 現代の論理的意味論. 東京, 岩波書店, 1988.

Putnam, H. *Mind, Language and Reality*. Cambridge, Cambridge University Press, 1975. (Philosophical Papers, Volume 2).

Putnam, H. "The Meaning of 'Meaning'". *Mind, Language and Reality*. Cambridge, Cambridge University Press, 1975. (Philosophical Papers, Volume 2). p. 215-271.

Putnam, H. *Reason, Truth and History*. Cambridge, Cambridge University Press, 1981. (Putnam, H. (野本和幸, 中川大, 三上勝生, 金子洋之訳) 理性・真理・歴史: 内的実在論の展開. 東京, 法政大学出版局, 1994.)

Putnam, H. *Realism and Reason*. Cambridge, Cam-

bridge University Press, 1983. (Philosophical Papers, Volume 3). (抄訳として, Putnam, H. (飯田隆, 金田千秋, 佐藤努, 関口浩喜, 山下弘一郎訳) 実在論と理性. 東京, 勁草書房, 1992.)

Putnam, H. "Models and Reality". *Realism and Reason*. Cambridge, Cambridge University Press, 1983. (Philosophical Papers, Volume 3). p. 1-25.

Putnam, H. *Realism with a Human Face*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1990.

Putnam, H. The Dewey Lectures 1994: Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind. *The Journal of Philosophy*. vol. XCI, no. 9, 1994, p. 445-517.

Putnam, H. *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999.

Putnam, H. "Sense, Nonsense, and the Senses: an Inquiry into the Powers of the Human Mind". *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*. New York, Columbia University Press, 1999, p. 3-70.

Putnam, H. Comments and Criticism when "Evidence Transcendence" Is Not Malign: a Reply to Crispin Wright. *The Journal of Philosophy*. vol. XCVIII, no. 11, 2001, p. 594-600.

Wright, C. Truth as Sort of Epistemic: Putnam's Peregrinations. *The Journal of Philosophy*. vol. XCVII, no. 6, 2000, p. 335-364.

(平成15年4月4日受付)

(平成15年8月8日採録)